報道関係者各位

2020年9月8日

発行：ヒッポファミリークラブ広報室
TEL:03-5467-7041
MAIL: kouhou@lexhippo.gr.jp

ヒッポファミリークラブ　News Letter 2020 vol. 2

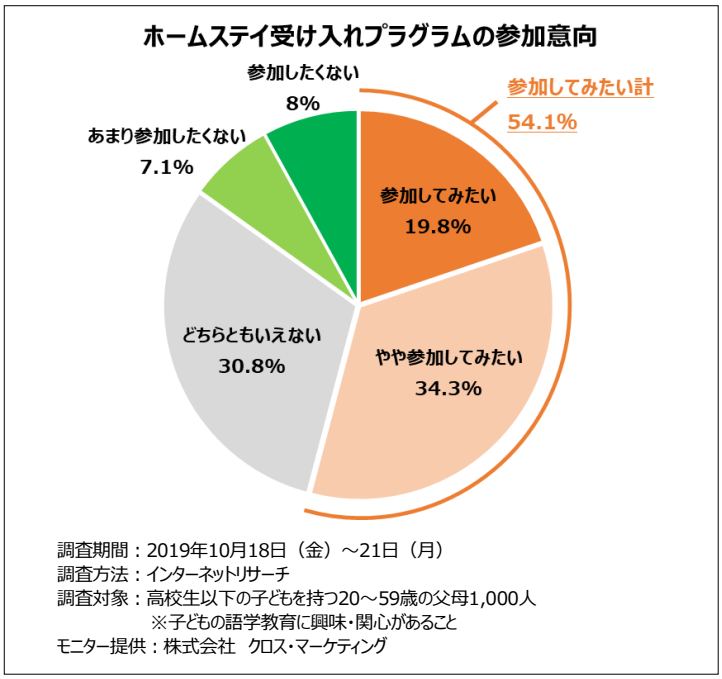
多言語教育を提唱するヒッポファミリークラブから、
多言語の習得や関連する研究、グローバル人材が育つ環境など、さまざまなトピックをお届けします！

- **家族で共有した体験を、新しい世界を拓く活力に**
- **子どもの「ことば力」を伸ばすには、親子で共に楽しみ、苦労する体験を**
  慶應義塾大学教授　今井 むつみ（発達心理学）
- **仲良し母娘で共に挑戦、初めての長期ホームステイ受け入れ**
- **インフォメーション（夏の交流プログラム実施レポート、オンライン特別講座の開催）**

家族で共有した体験を、新しい世界を拓く活力に

新型コロナウイルスの影響で広がった在宅勤務。学校が一斉に休校になったこともあり、今年は家族で過ごす時間が増えた家庭も多いのではないでしょうか。5年ごとに行われる総務省の「社会生活基本調査」によると、6歳未満の子どもをもつ夫婦の1日あたりの育児時間は妻が225分、夫は49分（いずれも2016年）。前回調査との比較では徐々に増えてきてはいるものの、日本では父親の子育てに関わる時間が少ないことが指摘されています。

ヒッポファミリークラブでは毎年、子どもの語学教育に関する興味や関心について把握するため、高校生以下の子どもを持つ全国の親を対象にインターネット調査を行っています。昨年10月の調査では、全体の22.1%が外国語を親子で習いたいと回答しました。また子どもに外国語を習わせたい場所は自宅が29.6%となっています。いっぽう0～3歳の子どもを持つ親では外国語を「親子で習いたい 49.5%」、「自宅で習いたい 46.7%」と答えており、子どもが小さいほど「自宅で親子共に外国語を学んでみたい」と考えていることがうかがえる結果となりました。



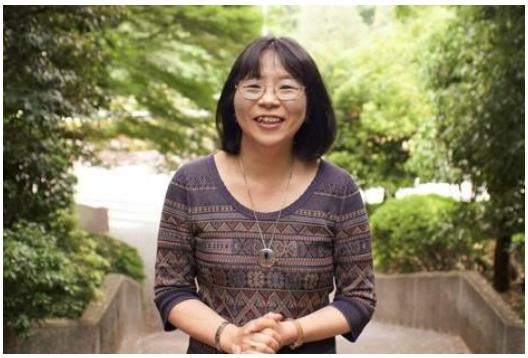
また自宅で外国語に触れる機会に関連するデータとして、外国人を自宅に招くホームステイ受け入れプログラムへの参加意向を聞いたところ、全体の54.1%が参加してみたいと回答しました。なかでも30代の参加意向が特に高く、男性は64.8%、女性は67.2%が参加に前向きな結果となりました。日常生活の中で自然に外国語に触れ、異文化交流ができることや、子どもだけでなく親も一緒に経験できるということが興味を持つ要因になっているようです。

自粛生活をきっかけに家族や子どもとの向き合い方が改めて問われた今年。家族を想う気持ちや何かを共に体験することへの関心が一過性で終わることなく、新しい世界を拓く活力につながっていくことを期待したいと思います。

子どもに必要な「ことば力」とは何か、またそれを育む大人の役割について発達心理学の専門家にうかがいました。

子どもの「ことば力」を伸ばすには、親子で共に楽しみ、苦労する体験を

慶應義塾大学教授　今井 むつみ
（発達心理学）



1989年慶應義塾大学大学院博士課程単位取得。94年米ノースウェスタン大学心理学部博士号取得。2006年より現職。赤ちゃんや幼児を対象に実験をして分かったことを論文にし、近年は、ことば力やことばのセンスを測定するアセスメントの開発や、一般読者向けの本の執筆・講演活動にも力を入れている。
著書に『ことばと思考』『学びとは何か』（岩波新書）、『ことばの発達の謎を解く』（ちくまプリマー新書）、『言葉をおぼえるしくみー母語から外国語まで』（針生悦子氏と共著、ちくま学芸文庫）などがある。また文章は小学校と高校の国語の教科書にも取り上げられている。2020年3月、小さな子どもを育てる保護者に向けて初めて書き下ろした本『親子で育てる　ことば力と思考力』（筑摩書房）が出版された。

新型コロナウイルスの影響で休校を余儀なくされるなか、オンライン授業が一気に広がった。多くの人たちは経済格差に起因するパソコンやインターネット環境の有無が子どもの学力の差を広げると懸念している。だがインフラよりも大事なのは、パソコンの限られた情報から子どもが自力で学ぶことができるのか、ということであり、そのことにもっと目を向けたほうが良い。なぜなら、「自分で学ぶ力」がある子どもはオンラインでもある程度は学べるが、そうでない子どもにとって、パソコンの画面から一方的に流れてくる授業は情報がただ素通りしていくだけでほとんど効果がないと言えるからだ。

「自分で学ぶ力」を育むために欠かせないのが「ことば力」である。「ことば力」にはさまざまな階層があり、ひとことで簡単に言い表すことは難しいが、重要なポイントはひとつひとつのことばを的確に使いこなせるか否か、ということである。もちろん、豊富にことばを知っていることは良いことだが、基本的なことばを自分が必要なときにすぐに取り出して使え、文脈にあわせてことばの意味を柔軟に修正できることのほうがもっと大事だ。

「ことば力」を育てるために、親は日常の会話を通じてことばに対する子どもの関心や注意をひきつけることを心がけてほしい。基本的に親が子どもにことばの意味を直接教えることはできない。子どもは自分の推論でことばを覚えていく。推論して覚えたことばを自らの気づきによって修正し記憶の痕跡を作る。「ことば力」を育てるためにはこのプロセスがとても重要だ。子は親の鏡というが、子どもは親のことをよく見ているので、親が関心を持っているものには子どもも自然と関心を向ける。親自身がことばのセンスを持ち、ことばの意味や使い方に敏感になれば、子どもも同じようにふるまう。このことは著書『親子で育てる　ことば力と思考力』（筑摩書房）で詳しく触れているので参照していただきたい。

子どもの英語教育に頭を悩ませている親は多いと思うが、子どもに「私には必要ないが、あなたには必要」「私は挫折したけどあなたはやりなさい」といったメッセージを暗にでも伝えていないだろうか。親が共に学ぶ姿勢を見せないと、子どもは英語を勉強するモチベーションを保つことができず、英語を学ぶことを重荷と感じてしまう。こうしたことを避けるには、親子で英語に取り組むのが一番だ。一緒に海外に留学するのも良いし、あるいは自宅に外国人をホームステイさせてみるのも良いだろう。

海外留学やホームステイの受け入れで得られる異文化の体験も貴重だが、子どもにとってさらに重要なのは「親と一緒に楽しみながら苦労を共有する」という体験だ。本来、子どもは親と一緒に何かをしたいので親が一緒にやってくれることに大きな喜びを感じとる。普段は何でもできてしまう親が自分と同様に目の前にいる外国人とのコミュニケーションに困っている。そして、その人と意思の疎通を図るために一緒に努力する。そういった体験の積み重ねが子どもに外国語への関心を芽生えさせ、子どもが外国語を学ぶモチベーションにもつながるに違いない。

仲良し母娘で共に挑戦、初めての長期ホームステイ受け入れ

ヒッポファミリークラブは国際交流活動の一環として、日本を訪れる外国人や留学生のホームステイ・ホームビジットを積極的に受け入れています。我が家がそのまま異文化交流の場となるこのプログラムには、毎年多くの会員が参加し、家族で共に貴重な体験をする機会となっています。今回は日本に留学する高校生の長期ホームステイ受け入れに挑戦した母娘のエピソードをご紹介します。

家族で行ったデイキャンプの思い出。富士山をバックに記念撮影。

神奈川県横浜市に住む上原さん一家は、会社員のお父さんと介護士として働くお母さん（幸恵さん）、当時はカナダの高校に留学していたお姉さんと中学生の妹さん（璃月さん）の4人家族。昨年8月下旬、メキシコ人留学生のラウラ・ナイエ・モリナ・ゴメスさん（以下、ナイエさん）のホストファミリーになりました。週末だけのホームステイを受け入れたことはありましたが、長期は初めての経験。約1年間、外国人と共に生活するという家族の挑戦が始まりました。

璃月さんの希望がきっかけとなった今回のホームステイ受け入れ。幸恵さんは自分がホストの立場になることで、留学中の娘さんがお世話になっている家族の気持ちがわかるのではないか、と思ったそうです。海外の高校に留学したいと希望している璃月さんのためになるだろうと考えたことも決め手となりました。

来日当初、ナイエさんは日本語がまったく話せず、コミュニケーションは英語だったそうです。好き嫌いはなかったので食事の心配はありませんでしたが、ナイエさんは人見知りの性格。自分から積極的に話しかけてくるようなタイプではなく、しばらくはお互いの距離を縮めることが難しかったようです。

ホストファミリーとしての生活は始まったものの、いつも帰りが遅いご主人とシャイな性格の璃月さん。気が付けば頑張っているのは自分だけ、という思いが幸恵さんの中に積もっていきます。ついに心の中で何かがはじける瞬間が訪れた時、幸恵さんは、ご主人と璃月さんに自分の気持ちを正直に打ち明けました。それからは家族全員でナイエさんとのかかわりを深くしていくことができるようになった、と当時を振り返ります。

ホームステイの受け入れでは、ゲストにハウスルールを守ってもらうことも重要なポイントです。上原家には使った食器は自分で洗うという決まりがありました。いっぽうでナイエさんには自分で掃除をする習慣がなく、このルールを守れるようになるまでには苦労があったそうです。さりげなく自分の行動で示す璃月さんと、無理強いしないよう根気強く言い続ける幸恵さん。母娘それぞれのアプローチが次第に奏功し、ナイエさんはこのルールを守れるようになっていったそうです。

ホストファミリーを経験して、母と娘それぞれの思い

今回の経験を通じて、幸恵さんは自分の器が広くなったと感じています。生活習慣や国民性の違いによる驚きや困惑は日常茶飯事でしたが、ゲストの人となりがわかるにつれて気にならなくなるのは、長期受け入れのメリットではないかと言います。また、この経験が我が家にもたらすものを考えるなかで、家族でお互いの顔を見たり、思っていることを気にする時間が増えたそうです。

いっぽう璃月さんは、ナイエさんと過ごした時間を通じて、これまでより外国人に対するアレルギーがなくなり、困っている人がいたら積極的に自分から話しかけることができるようになったそうです。将来の夢は保育士になること。どの国に行くのかはまだわからないそうですが、お姉さんと同じように長期の海外高校留学にも挑戦してみたいと考えています。

ナイエさんからもらったメキシコのお土産を手に。取材に協力していただいた上原幸恵さん（右）と璃月さん（左）

2020年4月末、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、ナイエさんは予定を3ヵ月早めて急きょメキシコに帰国することになりました。
来日時は全く話せなかった日本語は、ホストファミリーへの感謝や留学生活の楽しい思い出を自分のことばで語れるほどに上達していました。

インフォメーション

多言語教育やグローバル人材を育む環境への理解を深めていただくため、さまざまなイベントを開催しています。

オンラインではなく対面で心を通わす夏休み　飯山と無人島・釜島、2コースでキャンプ開催

新型コロナウイルスの影響で対面での交流が難しくなり、人との出会いやつながりを大切にするヒッポファミリークラブでもオンラインでの活動が増えました。このような状況で気持ちを開放する場が限られてしまったメンバーが再び一歩踏み出すきっかけを作りたいという思いのもと、「サマージョンキャンプ2020」と題し、8月8日（土）～11日（火）、長野県飯山市戸狩での3泊4日間と8月18日（火）～22日（土）、岡山県倉敷市釜島での4泊5日間の2コースでキャンプを実施しました。マスク着用や検温などの感染予防策を講じて、一般社団法人信州いいやま観光局、戸狩温泉街の民宿の皆さま、野外活動家の二名良日氏にご協力いただき、屋外でのアクティビティをより一層充実させたプログラムが実現しました。

「楽しかった」という感想が多かったカヌー体験

戸狩のキャンプでは、カヌー体験、茅の輪づくり、野菜収穫、水遊び、キャンプファイヤーなど、グループに分かれてさまざまな自然体験を行いました。参加者からは、「普段できない体験がたくさんできて楽しかった」、「久しぶりに帰りたくないと思った」、「コロナ禍でもやもやしていた気持ちが晴れた」などの感想が寄せられました。親子やお孫さんとの参加もあり、0歳～70代の幅広い世代が大自然の中で交流を深め、素晴らしい夏の思い出を作れたようです。

コロナ終息を願って茅の輪づくり

野菜収穫体験

無人島一周の様子

初開催となった無人島キャンプは、都市の環境から離れて何がしたいかを自由に考え挑戦することで、どのような時代も乗り越えていける底力を蓄えることをテーマに、瀬戸内海に浮かぶ無人島、釜島で行われました。自らテントを張って寝る場所を作り、火をおこして食事を用意するキャンプ生活に苦労しながらも、子どもも大人も一丸となって協力し合う貴重な体験が好評で、「不便で非日常な暮らしは慣れるのに時間がかかったが、それ以上に楽しさや達成感、喜びが多かった」といった声が聞かれました。島を一周する自然探検、竹や流木を用いたクラフト作り、浜辺でのキャンプファイヤーなど、雄大な自然に囲まれて非日常体験を味わいました。

秋のオンライン特別講座 「ことばと人間を自然科学する」

日時：9月22日（火・祝）13：00～15：30

参加費：１端末につき3,000円　オンライン会議システム「Zoom」ウェビナーでの開催です。

お申込みページ：https://passmarket.yahoo.co.jp/event/show/detail/01pskd115k547.html

■第１部　講演　13：00～14：00

中村桂子　JT生命誌研究館 名誉館長 「ことば、人間、科学者、科学」～大事なことを考えよう。

■第２部　対談　14：30～15：30

中村桂子　JT生命誌研究館 名誉館長、　酒井邦嘉　東京大学大学院総合文化研究科 教授

「科学者が人間であること」、「科学という考え方、科学者という仕事」～大事なことを語り合おう。

毎年好評の専門家によるオープン講座を今年はオンラインで実施します。第1部では、新型コロナウイルスにより日常が大きく変化せざるを得ない時代に人間としてどう生きることが大切か、今年4月にJT生命誌研究館の名誉館長に就任された中村桂子先生が生命誌の視点からお話しします。第2部では、中村先生と言語脳科学者である東京大学の酒井邦嘉教授がそれぞれの著書をもとに対談します。

＊当日の聴講やご取材も可能です。ご希望の際はヒッポファミリークラブ　広報室（kouhou@lexhippo.gr.jp）までお知らせください。